

論 説

都 市 の 位 相 (3)

水 口 憲 人

- はじめに 都市の「偏在」と都市計画
・ルソー、ジンメルと都市
1) 都市の「主題」化
2) ルソーと都市 (以上、『政策科学』11巻3号)
3) ジンメルと都市 (以上、『政策科学』12巻1号)
・都市と自然
はじめに
1) 作為の志向線
「支配理論」
「支配理論」への疑義
啓蒙の反省
2) 都市と自然：三態
ワイトルーウィウス、パラーディオ
ハワード
オルムステッド、関一
コルビュジェ
おわりに (以上、本号)
・都市とコミュニティ
・都市空間・都市計画・都市政治

・都市と自然

はじめに

人間は生来、自然を求めが、都市化は自然を破壊する。したがって、都市の中に自然を取り込もうとするのは人間本来の要求である この種の言説は常識に訴えるし、大要において多くの人を受け入れている。品田穰はこれを、「都市化され自然がなくなるにしたがって人は自然を求めようとするのではないかという仮説」、裏返せば「自然が豊かなとき意識的

に自然を求めない」という「仮説」と表現する(品田, 1974: 16)。あるいは、樋口忠彦は次のようにいう。すなわち人類は、生誕以来の自然の中での生活を懐かしむ「生物学的特質からくる根源的欲求」を持つが、他方では、環境や生活様式を大きく変化させ、都市という人工的環境を生みだしてきた。それゆえ、「都市の中に庭園や並木や水の流れや公園という人工の自然をつくりだそうとする試みは」、変化しない生物学的特質と、変化した人間の環境との「ずれ」を「補正」したいという「本性的欲求」に基づくと(樋口, 1993: 232)。だが、都市と自然の関係は、このような「仮説」や「欲求」に還元するだけで理解できるのだろうか。

「都市という人為的集落が作られるとき、それは一面でどうしても自然に対する暴力を意味せざるを得ない。だから人が都市を作るとき、自然というものがどのように人々に意識されているのか、が問題となる」(内田, 1987: 200)。内田芳明のこの文言は、仮に自然への要求が「本性的欲求」に根ざしたものであるとしても、それがなぜ意識され、意識されたものがどのように表現されているかに目を向けることを促す。つまり都市化との関係で「本性的欲求」が改めて「本性的」なものとして取り出され自覚される文脈や意識の有りようが問題になりうることを示唆している。自然の一部を切片として取り出しそれを風景とするのは都市的心性の所産である。風景とは、都市という社会関係が自然を主題として押し出した一つの表れである。われわれはジンメルの理論からこのような論理が抽出できることを先に見たが、内田のいうところはこのようなジンメルに通じる。

そして内田が、引き続き次のように述べるとき、われわれは少なからず戸惑いつつも、都市と自然をめぐる今ひとつの問題を見つけ出す。

人間の技術の力や文化の力が、ただ自然を征服し支配できる人間の力として意識されているにすぎないところでは、自然は生きた自然としては全く意識されていないわけである。かくして自然風景は残酷な仕方では傷つけられ破壊されていくことになる。これとは反対に、もしも人が都市建設にあたって、都市の建物や街路や、つまりは建築様式

とか建物の大きさや色彩とか、それらの建造物の全体的配置とか全体的都市景観とかを考えているのだとすると、そのばあいには「自然」は「風景」として、人間的形成物から独立した生きた対象として、人々に意識されていることになる。そしてこのように自然風景と都市の全体景観との生きた関連が意識され、その上で都市計画や設計がなされるのでなければ、自然と都市とが統一ある一つの風景となることはできないはずだ(内田, 1987: 200)。

「生きた自然」とは何だろうか。「征服」され「破壊」される自然は、それが死んだものと見なされるからそうなるのだろうか。死んでいるものも征服されるのだろうか。さらに、彼が提唱する都市計画や都市設計の特定のスタンスも自然に働きかける以上、「征服」や「破壊」と無縁でありうるのだろうか。それでも、このような戸惑いを括弧にくくるとすれば、彼は、自然の意味や姿は都市建設の態様によって変わりうるという問題の所在を指摘している。「生きた」「死んだ」、「残酷」「統一ある一つの風景」というやや神秘的な対位法は、内田自身の都市建設への態度が採用させた自然の意味づけであり、それは、都市がどのように造られるかへの関心が、人々をして、自然の意味や姿への関心を誘発する媒介になりうることの例示となる。内田は、都市と自然の関係は、単純に「本性的欲求」に還元しうるわけではなく、自然に関する「意識」の社会関係であることを指摘するとともに、都市では都市建設の有りようが、自然の意味と姿を形作ることを示唆している。

ちなみに『広辞苑』(第5版)は「自然」の意味を次のように整理する。

(ジネンとも)おのずからそうになっているさま。天然のままて人為の加わらないさま。あるがままのさま。(「ひとりて(に)」の意で副詞的にも用いる)枕草子267「に宮仕へ所にも、親はらからの中にて、思はるる思はれぬがあるぞいとわびしきや。」「そうなる」

(ア)【哲】(physis ギリシア・natura ラテン・nature イギリス・フランス)人工・人為になったものとしての文化に対し、人力によって

変更・形成・規整されることなく、おのずからなる生成・展開によって成りいたった状態。超自然や恩寵に対していう場合もある。

(イ) おのずからなる生成・展開を惹起させる本具の力としての、ものの性タチ。本性。本質。太平記2「物相感ずること皆なれば」

(ウ) 山川・草木・海など、人類がそこで生れ、生活してきた場。特に、人が自分たちの生活の便宜からの改造の手を加えていない物。また、人類の力を超えた力を示す森羅万象。「破壊」「の猛威」「の摂理に従って生きる」

(エ) 精神に対し、外的経験の対象の総体。すなわち、物体界とその諸現象。

(オ) 歴史に対し、普遍性・反復性・法則性・必然性の立場から見た世界。

(カ) 自由・当為に対し、因果的必然の世界。
人の力では予測できないこと。

(ア) 万一。平家物語7「の事候はば」

(イ) (副詞として)もし。ひょっとして。伽、一寸法師「舟なくては如何あるべきとて」

このように「自然」は多様であり、かつ、歴史と社会の特定の条件の下で、各々の意味の組合せも異なってくる(コリングウッド, 2002)。それでも『広辞苑』は、現在、殆ど用例がないと思われるの(ア)(イ)を別にすれば、の「おのずからそうなっているさま」「人為の加わらないさま」と、

の(ウ)の「山川・草木・海など」の2つが基本になり、その捉え方や対象化の仕方が多様な意味を作り出していることを伝える。そして伊藤俊太郎は、前者を「自然性」、後者を「自然物」と表現し、この2つの意味の交錯を解きほぐそうとする(伊藤, 2002)。解きほぐしの一例を紹介すれば、「自然性」を主たる用例としてきた伝統を持ち、「自然物」は「天地」や「万物」、あるいは「山川草木」と表現してきた中国の影響下にあった日本が、西欧的な「自然物」に触れるのは明治20年代であり、その時の混乱を

経ながら次第に現代の用法が形作られてきたという。

『広辞苑』や伊藤を参照した理由は、都市建設の有りようと自然の意味とのつながりという内田が示唆する問題を検討する際には、「自然性」と「自然物」の関係が論点になりうると考えるからである。そして桑子敏雄の丸山真男批判(桑子, 1999)は、本稿があらかじめ斥けておきたいこの論点の扱われ方の一例となる。

丸山の「近世日本政治思想における「自然」と「作為」」は、江戸期の朱子学を材料にして、近代的主体形成の系譜を探った著名な論考であるが、桑子は、自然に対抗させて作為を肯定する丸山の思想が、実際の自然破壊に手を貸してきたという。丸山の作為は、西欧的な近代的主体の普遍主義によって担われ、それは「ドメスティックな風景」や「日本の自然」を視野の外に置いた世界だからこそ、「山河崩壊」を高度成長のための作為として肯定する戦後日本の行動の支えになりえたというのである。近代的作為が、生得の状態たる自然に対抗させられたがゆえに、その作為は、「山河」の生得の状態を見えなくしたという論理である。「先王の道は、先王の造る所なり。天地自然の道にあらざるなり」という荻生徂来は、先王聖人の作為たる「道」を「自然性」と見なすのは誤りだと考えたし、このような徂来に注目する丸山も作為との対比で「自然性」を検討しているが、桑子の議論は、作為対「自然性」を「自然物」に対抗する作為という対比に組み替え、作為を否定的に描くことによって成立している。そして桑子が、「自然と作為」という丸山の問題設定が「自然と人間の連続性」を解体し、「日本の自然」を捉えられなくしているというとき、この組み替えが明瞭になる。都市建設は作為である。桑子の主張は、「自然物」の「自然性」と人間の「自然性」とを架橋するために、両者を隔てる作為を排するというロマン主義に通じる。そしてこの種のロマン主義からは、作為としての都市と自然の意味との関係は十分に見えてこないが、都市と自然は作為の問題を介して検討されるべきことを逆に教えているのである。ちなみに桑子は、西行の「心なき身にもあわれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕

暮」という有名な短歌を、丸山の思想が理解しえず捉えられないものとして描く。だが西行は即時的に「日本の自然」に没入したわけではない。彼は武士の身分と世間を捨てる作為を行った人物であり、その作為が、改めて自然を対象化し捉え直すという営みの前提となっている。「心なき身」とは主体の作為的自己観察である。西行から汲み取っていいのは、どのような作為がどのように自然を捉えるかという問題である。

アリストテレスは「人間は自然によって」「ゾーン・ポリティコン」だと考えた。彼のいう「自然」は「自然性」の系譜に属する。「ポリティコン」としてのポリス(=都市)は人間の生得的な傾向や性質の現れとしての自然であった(日下部, 205)。そして先に見たように、ジェイコブスの都市の捉え方にも、このような自然観が引き継がれていた。彼女の都市は、大草原のプレーリー犬の小屋や牡蠣の寝床と同様に人間にとっての自然であった。さらに彼女は、このような都市=自然の関係を見ず、「野生」や「緑」としての自然を都市に対抗させる思考を、自然のセンチメンタルな「ペット」化だとして揶揄したことも紹介した。都市を作ることは人間の生得的作為だとすれば、それは「自然性」としての自然であり、そのような自然=作為は、いたずらに「自然物」と対置されるべきではないという主張が、アリストテレス的「自然性」と、「野生」や「緑」という「自然物」の双方を使用することによって展開されていたことになる。都市で生活し活動することがますます「人間の条件」になりつつあるとすれば、都市づくりは「自然性」に似た作為になり、この作為=「自然性」が「自然物」をどのように扱うかが、「都市と自然」への一つのアプローチになりうる。彼女をヒントにしながらか、本稿も「自然物」を扱う作為としての都市建設に関心を寄せる。

1) 作為の志向線

「自然物」への態度が、都市造りという作為に、志向線のどのような相違をもたらすのだろうか。われわれは後に、E・ハワード、F・オルムス

テッド、関一、L・コルビュジェ等を通してこの相違を見ることにするが、志向のベクトルについて簡単な見直しをつけておくことから始めよう。3つのベクトルを識別することになるが、便宜的に、「支配理論」、「支配理論」への疑義、啓蒙の反省、としておこう。

「支配理論」

啓蒙主義の時代以降、西欧の近代社会をリードしてきた自然観は、人間の支配の対象としての自然という観念であった。「実験哲学の父」F・ベーコンは、人間が、観察や実験でえた知識に服従することによって自然に命令しようというこの「支配理論」を次のように直截に述べる。

人間の知識と人間の力は一致する。なぜなら、原因が未知の場合は、結果は生みだされえないからである。自然に命令しようとするならば、人間は(知識に)服従しなければならない(Palmer, 2001: 40から引用)

彼の描く架空の都市、ニュー・アトランティスは、自然を隷従させるための知識を獲得する実験施設や研究機関で満ちている。ベーコンにとって人間が自然から学ぶということは、「原因の思索から、仕事の方向をひきだせるようにするため」(ベーコン, 1970; 363)であり、つまるところ、自然を支配し利用するためであった。またデカルトも、理性の力で自然を観察・分析することによって、人間は、自然を「適切な用途にもちいること」ができるし、そのことによって人間は「自然の主人にして所有者」になりうると考えた。自然に対してこのように接することは「万人の一般的幸福」つながることがらだったのである(デカルト, 1997: 82)。そしてマルクスも、この「支配理論」と無縁ではなかった。彼は、社会化された人間、結合された生産者たちが、自然による直接的支配を脱し、「自然と人間との物質代謝を合理的に規制し自分たちの共同的統制のもとに置くということ」、つまり、「自分たちの人間性に最もふさわしく最も適した条件のもとでこの物質代謝を行うこと」が、「人間自身の力の発展」が「自己目的として認められる」「自由の王国」への前提だと見なしたのである

(マルクス, 1968: 1051)。

理性や実験精神,あるいは合理的統制を通して自然を服従させることが,人間の「幸福」や「自由」の拡大につながるというこの「支配理論」が,近代自然科学を基礎づけたし,自然科学は,社会の近代化や産業化を促進した科学技術を生んだ。そしてこれらの複合が,「成長」や「進歩」や「開発」を「自由」や「幸福」と結びつけて肯定する志向を支えている。都市づくりという作為が,この志向をとるとき,それは自然への「支配理論」を内なるベクトルとして含むことになる。

「支配理論」への疑義

「支配理論」への疑義も,科学技術の発達や産業化の進展がもたらした諸問題の自覚を介して登場してきた。産業革命後の人口増はこの種の問題の一つであり,そのことに対応しつつ,生産は生殖に追いつかないという有名なメッセージを出した T・マルサスは,自然が「支配理論」とは違った角度から捉えられだした一例になる。彼は自然が設定する限界に合わせ社会(とりわけ貧困層の生活態度)を調整することを主張した。彼にとっての自然は,支配する対象というよりは,人間が制御しえない限界を持つ与件であり,この与件に反しないよう制御される対象は,自然ではなく社会や人間の行動であった。また近代化や産業化は,その反動として,「支配理論」に対抗して人間の「内なる自然」を取り戻そうとするロマン主義的自然観を生みだした。「自然状態」を脱したこと,あるいはその脱し方に疑問を投げかけ,田園やアルプスを賛美したルソーはその先駆けであった。このロマン主義は,征服されえない自然と人間の「内なる自然」とを架橋するために,両者を隔てるものを排除しようとしたが,「進歩」や「成長」を支える自然観は,この排除の対象とみなされた。シュヴァルツヴァルトの深い森に「創造的景観」を見だし,「なぜ私はその土地に留まるのか」という問いを発する M・ハイデガーは,この種 of 自然観の一例を提供する。彼は「わたし自身の仕事がシュヴァルツヴァルトとそこ人間に内面的に帰属していることは,一世紀に亘る,なにものによって

も取替えることのできないアレマン的—シュヴァーベン的土着性に由来する」と述べ、自然の「本来性」を強調する(ハイデガー, 1994: 16)。

これらの自然観は、ディープ・エコロジストたちの思想的源流となっているが、ハイデガーの次の文言が示すように、その志向は自ずと反都市的である。

都会人は所謂田舎での滞在によって、高々一度だけ「活気づけられる」。しかしながらわたしの仕事は全部、これらの山々とその農夫たちの世界によって支えられ、そして導かれる(同, 16)。

彼は「討議、講演、旅行、論評、講義活動」等を都市で行うが、都市での諸活動は、シュヴァルツヴァルトでの「仕事固有の振動」の「中断」でしかない。

啓蒙の反省

M・ホルクハイマー＝T・アドルノの『啓蒙の弁証法』は、啓蒙的自然観の典型としてのベーコンへの言及から始まっている。彼らがベーコンに見たのは、迷信に打ち克つ悟性が、呪術から解放された自然を支配しなければならないという近代の啓蒙精神の原型である。この自然支配の意欲は、知を力とし「被造物の奴隷化」を際限なくおし進める。だが自然を支配することによって自然の強制力を打破しようとするこの精神は、「生命あるものを生命なきものと同一視」することによって、「いっそう深く自然の強制力の中に落ち込んでいく」。そして、啓蒙精神は合理性を核心として文明化をおし進めようとするが、その合理性の核心が自然の否定であることによって、例えばファシズムのような「神話的非合理性」の基盤を生むし、「人間の内なる自然を否定することによって、外なる自然を支配するという目的ばかりか、自らの生の目的すら混乱し見通せなくなってしまう」という事態を生むのである。「支配理論」＝啓蒙をこのように捉える彼らは、「啓蒙は啓蒙以上のもの、つまりその疎外態において認識された自然である」と見なす。

だが彼らは、このように反転する啓蒙への対抗を、ロマン主義や、ハイ

デガー流の「本来性」に求めようとしているわけではない。啓蒙は、ロマン主義者たちが批判するようにたしかに自然に対して破壊的であった。それでも「啓蒙の非真理は、その敵であるロマン派が昔から啓蒙に浴びせてきたような、分析的方法、諸要素への還元、反省による解体、などへの非難のうちにあるのではない」。ホルクハイマー＝アドルノが求めようとするのはいわば「啓蒙が自己自身について省察を加えること」であり、そのことによって展望される可能性である。彼らは、啓蒙の自己反省が、「精神が、自らの本質が支配にあることを自認し、自然のうちに帰ろうとする謙虚さを持つことによって、精神をまさしく自然へと隷属させていた支配への要求は、精神から消失する」可能性を生むことに言及する。またこの文脈で、自然支配の意欲が生んだ文明の諸制度も、人間が自然の必然性に従属してしまう「防壁」になりうるし、「来るべき自由の保証人」になりうることに目を向ける（ホルクハイマー＝アドルノ、1990、第1章）。

ともあれ彼らは、啓蒙がその疎外態に反転する弁証法の中に、人間と自然の関係を探ろうとした。それは「支配理論」でもないし、ロマン主義でもない。両者の対抗が生じる関係への関心が彼らの理論を支えている。そして彼らの関心は、都市を建設するために自然を支配・征服する志向でもなく、都市に負の価値を負わせることによって、自然を賛美しようとする志向でもない、今ひとつの志向がありうることを示唆する。それは「支配理論」が覆い隠していた自然を都市の中に取り戻すという志向につながる。

ところで都市計画家たちは、空間を造形する専門家たる位置を占めることによって都市造りという作為の主要なアクターになるが、3つの志向線は、都市計画家たちにどのような役割を託そうとするのであろうか。「支配理論」は、自然を制御し、それを都市の発展に役立てる知識や技術を持つ計画家に期待するであろうし、ロマン主義の系譜は、「成長の限界」を自覚し、都市の生み出す諸困難から自然を隔離し防衛する、ディープ・エコロジストの計画家像を生み出すことになろう。そして第3の志向の計画

家は、自然を都市に取り込んでいく「過程」の中に専門家としての自らの役割を見いだすかもしれない。ホルクハイマー＝アドルノがいうように「啓蒙にとっては、過程があらかじめ決定されているということのうちに、啓蒙の非真理がある」とすれば、啓蒙の自己反省とは、自然制御の知識や技術を都市計画の知識や技術に還元することによって「過程」をあらかじめ囲い込んでしまうことではないし、自然を「過程」から隔離することでもないからである。

2) 都市と自然：三態

作為の志向線を念頭に置きながら、ハワード、オルムステッド、関一、コルビュジェ等の実践を材料にして、都市と自然の関わりを具体的に見ていくが、彼らが活動した、19世紀 20世紀の「前史」についても簡単に触れておこう。

ウィトルーウィウス、パラディオ

カエサルとアウグストゥスに仕えたローマの建築家ウィトルーウィウスは、「ウィトルーウィウスの建築書」を遺しているが、そこで彼は「もっとも健康的な場所の選択」を都市(=城市)を造る第一の原則にあげ、この原則に沿って、「霧も霜も少なく、暑くもなく冷たくもない温暖な天空の方向」や、「寒暑の交代」がそこに住む人間の体を損なわない条件等を検討している。湿度、気温、日照、風向き等の自然の諸条件が、都市造りの前提として勘案されたのは、人間自身が「熱と湿、地と気」の「元素」から構成されている自然であり、これらの条件と調和することが必要だと考えられていたからである(ウィトルーウィウス, 1979)。「市民の目的に適う第二の自然。これが彼らの建築なのである」。古代ローマの建造物に接したゲーテは『イタリア紀行』の中にこのような感想を書きしめているが(ゲーテ, 1942: 163), この感想も、健康さ、快適さ、あるいは現代風にいえばアメニティを、自然の条件を配慮することによって確保しようとした都市造りの姿勢と無縁ではないであろう。そして、建築や都市計画

の歴史の教えるところによれば、このような前提は、アリストテレスが「都市計画の考案者」と呼んだギリシャのヒポダモスに通じていたし、ルネッサンス期にも引き継がれていった。『イタリア紀行』は、ゲーテが、その才能に「何か神的なもの」を感じ、魅了されたルネッサンス時代の建築家パラディオに触れているが、そのパラディオは『建築四書』の中に「市内の道路の配置にあたっては、その都市が位置する場所の大気の温度と天空の方位に配慮すべきである。寒冷な、あるいは温暖な空気の都市では、街路はたっぷり幅広くつくるべきである。なぜなら、道路の広さによって、都市はより健康的に、より便利に、より美しくなるからである」という記述を残している（パラディオ、1986：240）。都市は健康性に留意して造られなければならないし、そのためには、自然の条件に目を向けなければならない。これがギリシャやローマ、そしてルネッサンスの人々の考え方であった。

だが紙野桂人の興味深い指摘によれば、この伝統の中で、緑に対する関心は概して低かった。市外の道路には、両側に植木を植えることが試みられたが、市内の道路では街路樹は植えられなかった（紙野、1990）。「都市の内部で、りっぱな建物によって美しさが加わるように、都市の外では、樹木によって道路への装飾が増加される」（パラディオ、1986：239）。こう述べるパラディオにとって、都市の内部は、広場、神殿、列柱廊、その他の公共建築物と街路が関連づけられる空間であったが、緑はむしろ郊外で活用される素材であった。彼のヴィッラ（＝別荘、別邸）への言及も、当時の、都市と緑と近郊の関係の理解の有りようを示している。「夏期には、大いに涼しさをもたらし、また非常に美しい眺めを形作る」「小高い、晴ればれとした場所」や「絶え間なく風がそよいでいる」こと等を勘案して作られるヴィッラは、緑に象徴される自然と人間が触れあう郊外の建築物であり、郊外にあることによって「都会の刺激で疲れた心が、大いに回復され、慰められ、そして、静かに文芸の研究や瞑想にふけること」が可能になると考えられていたのである（同、189）。このような

ヴィッラは、都市ではなく郊外が、当時の人々、とりわけ富裕な人々に緑と接する空間を提供したことを示唆している。

緑にさほど関心を払うことなく追求された都市のアメニティは、都市の利便さと郊外の緑との均衡を与件としていたといえるかもしれない。そしてこの均衡は、産業革命が都市の相貌を大きく変えるまでの、西欧の都市の特徴の一つであったといえよう。われわれは先に「パリの住人が自分では田園に行く気でいても、実は田園に行くのではなく、パリを伴っていくのです。歌うたいたちや、才人たちや、食客が取り巻きになってお供をするのです」というルソーによるパリ人の観察を引いた。ルソーの目には軽薄に映ったとしても、ともあれ彼の時代のパリの人々も、田園に行くことによって都市の生活と近郊の緑との均衡の下に生活していたのである。

現代の都市は、緑に無関心ではない。皮肉な観察者の目を借りれば「自然というのは緑、グリーン、緑化という思いこみがいたるところにあり」、自然を緑に還元してしまう「歪んだ」思考を生んでいるのが現代の都市である(野田, 1998: 83)。冒頭に紹介した樋口や内田の言説は、都市に関連して緑が注目されている一例になろうし、都市計画の類書の多くは、緑を都市造りの重要なテーマとして設定している。あるいは、「都市と緑地」に関わった先人たちの業績が掘り起こされ追跡される(石川, 2001)。これらは、かつての均衡が崩れ、次第に維持しがたくなってきたこと、またそれが、「都市と緑」を主題として押し上げてきたことを示している。そして緑の主題化は、都市と自然の位相もまた変化したことを示している。

ギリシャやローマ、ルネッサンスの都市は、気温や湿度、日照、風向き等の自然の条件に素朴かつ即時的に依拠していた。現代の都市は例えば冷暖房設備を開発し、このような制約の克服と征服を可能にする高度の技術によって支えられている。そして技術の応用によって、都市は利便さを追求する機能空間の集合と化し、自然との調和の余地はますます狭められていった。さらにこの趨勢は、郊外や近郊農村を都市化し、そこから緑を駆逐していった。都市内の緑に無関心でいられたかつての均衡は崩れ、樋

口のいう「生物学的特質からくる根源的欲求」としての緑が、都市の問題として改めて自覚される状況が生まれたのである。

ハワード

ハワードの田園都市は、このような変化を表す一つの記念碑である。彼は都市、農村、田園都市の特徴をランダムに列挙しているが、都市と農村の特徴を便宜的に利点と欠点に分けて整理すれば、各々、次のようになる（ハワード、1968）。

（都市）

利点：社会的機会、娯楽の場所、高い金銭的賃金、雇用機会、照明の輝く街路、宮殿や豪華な建築物

欠点：自然からの締め出し、群衆の中の孤独、仕事場からの距離、家賃・物価高、過度の労働時間、失業者の大群、費用のかかる排水、しめっばい霧とからからの日照り、不潔な空気とどんよりとした空、スラムとジン酒場

（農村）

利点：自然の美しさ、新鮮な空気と低家賃、粗放な土地、茂み・牧草地・森林、豊富な水、太陽の輝き、

欠点：社交の欠如、仕事のない労力、侵入者への警戒心、長時間労働と低賃金、整備されていない排水、娯楽の欠如、公共心のなさ、改革の必要性、雑然とした居住、荒れ果てた村落

（田園都市）

自然の美しさ、社会的機会、近づきやすい野原や公園、低家賃、高賃金、低い地方税、多くの活動、安い物価、苦渋労働がない、広い事業分野、資本の円滑な流れ、澄んだ空気と水、整備された排水、明るい家庭と庭園、煤煙なし、スラムなし、自由、協働

見られるように、自然を柱の一つにして都市と農村が対比されている。農村は自然とポジティブな関係を結ぶが、都市はネガティブである。気温や湿度、日照、風向き等に配慮したかつての都市に取って代わったのは

「からからの日照り」「不潔な空気とどんよりとした空」の都市である。そして農村の荒廃や停滞が、都市と自然のこのような関係と表裏して理解されている。ハワードが捉えたのは、自然の制約の克服と征服を可能にする技術の発展と結びついた産業革命以降の都市の変化が、都市と農村の関係も変え、それが都市と自然をテーマとして浮上させてきた現実である。

『明日の田園都市』はこの現実を投影している点で記念碑的であるが、さらにこの現実と、都市と自然の関係への特定の態度を表明している点でも興味深い。彼は都市と農村の各々の利点を合体した田園都市構想を、双方の「結婚」だという。それは「結婚」でえられる良き状態は、「独身」としての都市ではえられないという見解の表明でもある。社会的活力という都市の利点は、自然を犠牲にするコストを代償として生みだされているとみなされたのである。「過密によってえられるものは何もない」。これは田園都市レッチワースの共同設計者、R・アンウィンの著作の表題であるが(Unwin, 1912)、それはハワードの自然観を支える観点でもある。過密、あるいはより一般化していえば、都市のもたらす「集積の利益」は、基本的なところで、緑に象徴される自然とは相容れないという観点を、上述の項目一覧から見てとることができよう。彼は、当時の為政者が、農村の人口減と都市の過密を、半ば不可避の趨勢と見なして、対策を立てようとしないことを嘆き、ロンドンの将来を、上で見た都市の欠点が堆積する暗いものとして描いている。田園都市には、このような傾向に対する、「他に移住して、より良くより輝かしい文明を、どこにでも築き上げるといふ単純な対策」(ハワード、1968: 254)たる意義が付されているのである。

田園都市は、約一世紀前の構想である。その後この構想は、快適さの内実に自然と人間の関係を組み込もうとする都市計画の指針の一つとなった。それは都市と近郊の緑をめぐる均衡の崩壊を、都市に「見切り」をつけることによって回復しようとした試みでもあった。

18世紀のルソーは、都会人の軽薄さと対比して田園やアルプスを賛美し

た。それでも当時、都市と近郊農村は、それぞれの自己主張のバランスを保持しえていた。このバランスが崩れた産業革命以降の都市では、ルソーがさらに増幅される。ハワードがあげる農村の利点を、山と森と農家の「本来性」として意義づけし、それを「都市の世界」に対置するハイデガーの思想はその一例であった。都市からの脱出という志向で自然を取り戻そうとした田園都市は、このような思想とつながり、それを具体化する計画戦略でもあったのである。

もっとも、ハワード自身は思想家ではなかった。彼は、公営企業方式で土地を公有化するという建設と経営の方法を工夫し、レッチワースとウェルウィンに実際に田園都市を造り出した実践家であった。そしてこの実践的成果が、都市の過密を回避することによって、既存の都市とは別の所に「田園の中にある都市」を作るという彼のアイデアへの注目度を高めていった。それはマンフォードの、飛行機と並ぶ「20世紀初めの偉大な発明」という饒舌とも言える讃辞を生みだしたし(ハワード, 1968: 45)、一連の「ニュー・タウン」建設を根拠づける理論としても影響力を発揮していったのである。

それでも一世紀の実践は、「結婚」の構想が必ずしも目論見通りには行かなかったことを示している。田園都市のイメージを託された郊外の住宅都市は、郊外から田園を駆逐する作用を果たしたし、建設された住宅都市も、都市的利便性や快適性、あるいは社会的活力の点で、ハワードの構想とはかなりの隔たりを見せた。この実践は、建築や都市計画の通史の中で例えば次のように概括されるようになる。

批評家たちは直ちに、田園都市が本来小規模の出来事にすぎず、手に負えない集中都市に対する解決策とはなり得ないことを指摘した。彼らは、中央に緑の空地をもつような原型的な計画は、伝統的な都心の生気を打ち消すであろうと批判した。また、自己充足という主張にもかかわらず、田園都市は近接した大都市の衛星都市となる宿命にあり、その結果単なる田園郊外と化すであろうとも指摘された。そして

事実、それは田園郊外住宅地として最も普及することになるのである
(コストフ, 1990: 1204)。

このような評価は、都市からの脱出によって都市と緑という主題を処理しようとした『明日の田園都市』は、その戦略が、必ずしも成功したわけではない試みの起点としての記念碑的意味も併せ持っていることを伝える。

オルムステッド, 関一

だが、都市と緑はこのような戦略だけで対処されたわけではない。ニューヨーク市のセントラル・パークを手始めに、シカゴのサウス・パーク、デトロイトのベレ・アイル・パーク、ボストンのフランクリン・パーク、ロチェスターのセネカ・パーク等、多くの都市公園の設計や造成にかかわったオルムステッドは、都市の内部に緑を取り込もうとした。彼の実践と思想は、ハワードとは異なる戦略の顕著な例となる。

オルムステッドの研究者、A・ファインは、オルムステッドの活動が、国民の将来は、都市の活力に依存するという信念に支えられていたという(ファイン, 1983)。事実、オルムステッドは「わが国は今や発展期に入った。ここでは大都市生活をもたらす利便と安全、秩序、そして経済に立脚したところに幸福が存在する。大都市の発展なくしては、美德も見識も安寧も増進しはしない」と述べる(同, 28頁から引用)。ファインの表現を引けば「オルムステッドの仕事を根底で支えた前提」の一つは「都市化への大変革を全次元にわたって把握しかつ、それを是認すべし、とした点にある」(同: 28)。人々にとって、またオルムステッドにとっても「都市こそが活動の主舞台」であった。と同時にオルムステッドは、現実の都市では犯罪、精神障害、アルコール中毒、買春、そして貧困が増大していることにも目を向け、都市の活力のためには、このような社会悪を根絶するか減らすように努めるべきだとする。そして、そのような社会改革とは「極度の貧困ゆえに墮落してしまった人びとに、人間性のもつべき尊厳を取り戻させること」(これは彼が賛同の意を込めて引用するフランスの社会主義者ルイ・ブランの言葉である)であり、「民主主義」の問題であるとい

う。したがってセントラル・パークは、単に公園が作られるということにとどまらず「至上の意義をもつ、民主主義の発展の所産であって、私に言わせれば、その成功にこそわが国の芸術と美的文化の振興のいかに大きいかかわっている」ものであった(同、22頁から引用)。

都市になぜ木が必要なのか。オルムステッドはこのような問いを立てるが、それは、人間を「幸福」にする都市の可能性を信頼しつつも、その害悪を少しでも減らしたいという彼の思いが生んだ問いである。活発な営業活動や街路の往来は、都市の活力の象徴であるが、野生の木は空間を無秩序、狭隘にし、都市の活動を妨げる。その意味では、木は都市の障害物である。だが、木が、ちょっとした憩いのための木陰や、景観の美しさや、建物の隔離や遮蔽の機能に役立てられるとすれば、それは都市の活動を効率的にし、潤いをもたらすものになる。公園は「木」のこのようなアイディアを膨らませたものであり、それは都市的生活に不可欠なレクリエーション施設の一つとして位置づけられる。

都市は人々の活動を、テンポよく効率的なものにするが、それはかえって活動の慌ただしさを離れた静穏な環境を求める要求を生み出す。彼はこの要求に対応するレクリエーションを「静的」(receptive)なレクリエーションと呼ぶ。また、農村生活と比べれば仕事と家庭のつながりを分断する都市は、身体を活用する「動的」(exertive)なレクリエーションの要求も高める。公園は、この2つの要求に対応する施設であるが、そのための土地を入手することは、個人の力では不可能である。したがって、公共施設として公園を提供することは、民主主義の政治体がはたさなければならない義務の一つになる。このように考える彼は「公園問題」を他ならぬ都市の問題だとしたのである。彼は、ニューヨークを初め、多くの都市で造っていった公園のイメージを次のように描く。

われわれは、人々が一日の仕事を終えた後、たやすく行くことができ、そこで小一時間、街路の喧噪や騒音以外のものを、ながめ、聞き、感じる土地を必要としている。そこでは実際、都市は、人々から遠ざ

かるであろう。われわれは、都市の街路や商店や仕事部屋との違いを可能な限り際立たせる、便利にして秩序と小ぎれいさが保たれている土地を必要としている。とりわけ、われわれをして、他人に対する共感から遠ざけ、疑い、警戒心、嫉妬を持って歩かせる都市につきものの条件と、それを抑えることとの違いを際立たせる土地が必要である。実際われわれは、簡素にして広い、清潔な芝生のオープン・スペースを必要としている。それは、光と影の多様な組み合わせを造り出す十分な数の木々に囲まれた、多くの遊びができる地表になろう。これがわれわれが求める公園の姿の中心である(Olmsted, 1997: 80)。

公園は都市そのものではない。それでも「公園は、可能なかぎり、都市の補完でなければならない」(ibid., 81)。そして公園は、都市から「たやすく」「遠ざかるため」の、都市の中に必要とされる施設だったのである。

また彼は、「公園問題」を社会改良の文脈でも捉えていた。彼は、都市の市民、とりわけ低所得層の野卑さ、無教養、粗野さを嘆く「財産と影響力」のある階層が、実は「自分のポケット」を気にかけて、公園の意義に無関心であることが、事業進捗の妨げになっていると見なした。そして、このような姿勢は、公園で、自分たちの子供が元気に遊んでいる姿を見て、一度ならず涙を流す貧しい母親たちに共感する彼の感性とつながっていた。公園は、都市化の波の中で、不遇な位置に押しやられた人々にさしのべられる手であり、都市政治の階層・階級問題を「緩和」する社会改良の方策でもあった。

このような公園は誰が設計し、その造成をリードするのだろうか。彼は、都市行政の通常業務に携わる部局や、私的な利害関心に囚われている一般市民にはこの任務は直接には任せられないとし、「選ばれた少数の集団」にこの課題を託すことが「効率的」であるという。だがこのことは「公的討論の利点に反対したり、低く見積もろうとすることではない」(ibid., 85)。むしろ逆である。「公的討論」の過程に「選ばれた少数の集団」たる専門家の知識や技術が正当に位置づけられる「民主主義」の体制が良い公

園を造ると考えるのである。セントラル・パークの造成は、実際にはマシーン政治との軋轢の中で紆余曲折したが、それでも彼は、ニューヨークの経験を、「公的討論」の中に専門家を位置づけたケースとして他の都市への教訓としようとしたのである。彼は、かつてはセントラル・パークは「市の低所得層のピア・ガーデン」になるとしてその建設に反対していた『ヘラルド』紙が、やがて「この国で、誰か不機嫌な気分におそわれている者がいたら、彼を、日曜日のセントラル・パークに連れて行くがいい。そして公園に来る人々を数時間ながめさせるがいい。人々は、豪華な乗り物では来たりはしない。彼らは徒歩か、極めて民主主義的な乗り物である路面電車で公園に来る……」と好意的な記事を掲載しだしたことを紹介しているが (ibid., 94), この紹介の背後にあるのは、「公的討論」の過程に身を委ねた専門家の自負である。

そしてこのような専門家は、その活動にふさわしい技術の体系を追究する。彼は自らの技術を「景観計画」(landscape architecture)と名づけた。それは英国風の「造園学」(landscape gardening)とは一線を画する命名であり、「造園学」では包摂しえない多様な活動が一つに総合化され、専門的職業として確立する過程で生まれた用語である。「景観計画」は造成、排水、道路、橋、護岸等の土木工事、建築、園路、広場、植栽、さらには、入園者の啓蒙等の異なる専門領域の総合化のためのコンセプトであったが (石川, 2001: 56), セントラル・パークという、都市の中に作られたアメリカ最初の大規模公園は、緑をアーキテクトする専門家集団や用語を生み出したのである。

ちなみにファインは、オルムステッドの手がけた公園は、自然の諸要素の特徴や関連を意識した生態学的デザインの原則が可能にしたとし、生態学的思考がオルムステッドの仕事を方向づけていたという。それは、気温や湿度、日照、風向き等の自然の条件を意識していたウィトルーウィウスやパラディオを連想させるが、都市と緑を結びつけるアーキテクチュアは、このような生態学を内に含んでいた。

セントラル・パークの入り口をめぐるやりとりは興味深いエピソードである。オルムステッドたちの案は、主入り口へ通じる門も広場もなく、形式ばらずに曲がりくねらせた苑路が入り口から中へ延びているだけであったが、それは大都市の中心部の公園に田園風の入り口を設ける愚かな試みだと批判され、四箇所に入り口に堂々たる門を作る対案が出される。それに対しオルムステッドたちは、常時公開という公園の使命を果たすためには、主入り口やその門など必要ないとし、さらにその門を壮麗にしようとする考えを、自然の素材でできているものを帝政風の人工物で取り替えようとする貴族主義だと批判している。公園とは、「人間性のもつべき尊厳」を取り戻す社会改革の一部であり、彼の協働者 K・ボアの表現を使えば、都市という環境の下で、「民主主義の理念を樹木と土に託して表現する」手段だったのである(ファイン, 1983: 20)。

オルムステッドは、記憶喪失という不幸な晩年の後、一九〇三年に世を去っている。それは『明日の田園都市』が公刊された翌年であったが、人間の「活動の主舞台」としての都市と生態学的な緑を、アーキテクチュアとしてつなごうとした彼は、産業革命を経験した都市が、緑に対して取りうるハワードとは違った戦略を示したのである。ハワードは都市に「自然からの締め出し」「不潔な空気とどんよりとした空」しか見なかったが、オルムステッドは公園造りを手がけることにより都市の中に緑やきれいな空気、日光、オープン・スペースを取り込もうとした。彼にとっての公園造りは、「民主主義」の中で専門家の役割が試される社会改革のアーキテクチュアであった。

関一も、このようなオルムステッドにつながるが、彼は、都市と緑という主題をハワードの田園都市との関連で意識している点で、さらに興味深い。「松の木は灰色の葉を持って居ると答える児童を有する現代の都市生活は禍なるかな」(関, 1988: 145)。急速に進む工業化が、大都市大阪から緑を駆逐している現実に直面した彼は、「都市の緑化」を喫緊の課題と見なした。田園都市の理論は、この課題への処方の一つに見える。だが関

は、この理論は、自足自給の小都市を理想の単位としていること、土地公有論に基づいていること、そして何よりも「大都市排斥論」であるがゆえに、「理想的と言うより多分に空想的」であり、「其儘に何れの国にも受け入らるべきものではない」(同, 107)と考えた。田園都市論が全否定されているわけではないにしても、その評価は、その処方への注目ではなく、都市と緑を主題に押し上げ、「緑地地域を都市内に含むこと」という、その後の都市計画の「新思潮」や「新傾向」が生まれるきっかけを作った点に力点が置かれている。

そしてこの、都市内部の緑という「新思潮」には二重の意義が与えられている。第一に、郊外 = 緑、都市 = 社会的活力という郊外と都市の均衡論には与していないことである。彼の主張は、大阪市が周辺の田園や農村地帯を取り込んだ市域拡張の後に行われているが、市域拡張が、都市の外縁に緑を配する政策であるとみなされることには異を唱えている。都市の内部に緑を維持保存し「依って将来の市民の福祉を確実にする」ことこそが「都市計画の新傾向」であり、したがってそれは、「六十余平方哩の大大阪に屋根瓦の海を出現せしむることを以て大大阪の完成と思う」「非常なる間違」に対置されるべきであるし、市域拡張は、この「新傾向」を実現する「絶好の機会」だとされていたのである。市域に編入された田園地帯は、既存都市内の緑の欠乏の救済手段ではなかったのである。第二に、ハワードから「大都市排斥論」を嗅ぎ取ったように、「新思潮」は、ルソーやハイデガーにつながる反都市主義への対抗という文脈でも意識されている。関は、緑化という課題に手をこまねていることは「大都市は国民の墳墓であるというルッソーの予言」(同, 149)を現実のものにしてしまうことであるという印象深い表現でこのことを強調する。

そして都市計画、とりわけ「自由空地」の設定が、この二重の意義を現実化するアーキテクチャの軸であった。当時の都市計画法制や都市の捉え方は、空地を未建築地、すなわち将来建築される土地と見なしていた。自由空地は、このような未建築地ではなく非建築地であり「建物に付随せ

ざる空地であって、大小の公園、競技場、運動場、墓地、農耕地、樹林地等の所謂緑地地帯」のために確保される土地である。彼は、自由空地を「在っても無くてもよい猫の尻尾ではない。市民生活の第一要件である」（同、150）とし、その都市計画上の位置づけを明瞭にしようとしたのである。

ちなみにヘインズは、晩年の関が、権威主義ないしテクノクラシーへの傾斜を強めていたことを指摘する（Hanes, 2002）。オルムステッドとの対比でいえば、アーキテクチュアを駆使する「選ばれた少数の集団」が「公的な討論」の過程から遮蔽されて公園を造るというメンタリティーを関は持っていたのではないかという指摘といえよう。だが関は、天皇主権の体制の下で、助役、市長を務めた為政者であった。このような為政者に「by the people」の立場を求めることは極めて困難であり、彼らは多かれ少なかれ「for the people」の枠で思考し行動せざるをえなかった。関のテクノクラシーへの傾斜も、この制約の表れであったとすれば、「田園都市」から反都市主義を嗅ぎ取り、都市の内部に緑を造り出すことを市民の「福祉」の課題とした点に、彼の「for the people」の内実があったと見なしてよいであろう。

コルビュジェ

「大都市は国の生命を支配する。大都市が窒息すれば、国は埋没する」（コルビュジェ、1967：79）。コルビュジェは、「窒息」しつつある大都市に目を向け、それに対処することが時代の課題だという。「田園都市」戦略はこのような課題の処方になりうるのだろうか。彼はそれを「運動家の筋肉の手当はするが、心臓が病気で危ないことを見ようとしぬい」態度であり、都市の中心の困難に背を向ける「偽りの議論」だとして斥ける（同、94）。「都市の中心に専念し、それを変えなければならない。これは最も簡単な解決である。そしてもっと簡単に言えば、ただ一つの解決である」（同、95）。こう述べる彼は、ハワード的志向に対抗して、「故障したエンジン」たる「都市の中心」を改造することを自らの都市への志向に設定し、

次の4つがそのための「厳しい簡潔な公理」であり、かつ都市計画の「根底」の定式化だとする。

- 1 交通の要求に応じるため都市の中心の充血をなくすこと。
- 2 事務活動に必要な接触を実現するため、都市の中心の密度を高めること。
- 3 交通手段を増大させる、すなわち現代の輸送手段の新しい現象（地下鉄、自動車、電車、飛行機）に対して効果のない現在の街路の概念を完全に変えること。
- 4 植樹面積を増やすこと。事務活動の新しいリズムは注意を集中した仕事を必要とするが、これは、それに有効な静かさと十分な健康を確保するただひとつの方法である（同、93）。

この「公理」が示すのは、都市の「集積の利益」への関心である。彼からすれば、「集積の利益」を生み出すはずの都市が機能不全に陥っているとき、必要なことは、「田園都市」の主張や実践のように、「分散の利益」を「集積の利益」に代えることではなく、「集積の利益」をさらに拡大する方途を探ることだったのである。そして「植樹面積を増やすこと」も、この方途の一部に位置づけたのである。

コルビュジェの著作には、例えば、「われわれは断言する。人間は機能的に秩序を行使し、人間の活動と思考は直線と直角によって支配されること、そして直線は、人間の本能的な手段であり、思考の高い目的であることを」等（同、29）、直線、直角、秩序、さらには幾何学を結びつけて肯定的に語る箇所が随所に登場する。また、都市が語られるときは、これらに、鉄筋、エレベーター、ガラスとともに、太陽の光、空間、緑が付け加わり、彼はそれらの集合を「デカルト主義的都市」と名づける。彼のニューヨークに関する言説は、この「デカルト主義的都市」とその中の緑、ないし「植樹面積を増やすこと」の位置を知る手がかりになる。

彼はニューヨーク訪問時、「ニューヨークの摩天楼は小さすぎる」と発言し、人々を驚かせた。マンハッタンの摩天楼は、便利かつ合理的に見え

るが、デカルト的合理主義からすればまだ「野蛮、未開」であり、進歩した技術がより高い摩天楼を造ることを可能にしていると主張し、セットバックやスロープをなくすこと、北側にはオフィスを作らず陽光を取り入れること、さらには当面はフロアを支えるために壁が必要でも、将来、技術的に可能になればオフィスから壁をなくすこと、また地下鉄、バス、トロリー、自動車で途切れなくアクセスできる回廊を作ること等の工夫で、マンハッタンの摩天楼は、現在よりさらに大規模な「青い空に輝く構想のカテドラル」になりうることを提言したのである(コルビュジェ, 1968a: 66)。ヨーロッパの諸都市は、古い枠組みの時代錯誤的残存が、都市の拡張を麻痺させている。デカルト的合理主義は、引っ越しの時にがらくたを整理して捨てるように、余分なものを省き、技術的要請に従った都市を造ることを要求する。このように考える彼は、古い枠組みから相対的に無縁だと思われるマンハッタンも「技術の革命的進歩が生んだ内的要請」に照らせば「野蛮、未開」だと見なしたのである。マンハッタンは、直線、直角、幾何学が、鉄筋、エレベーター、ガラスと結びつき、合理的にして機能的な秩序を造り出すという彼の都市イメージを投影する恰好の都市だったのである。

緑についてはどうであろうか。彼は次のように述べ、「デカルト主義的都市」に緑は不可欠だという。

都市には木がない!と言っても言い過ぎではない。……太陽、空間、木、それらを私は、都市計画の基本的な材料、「本質的な喜び」と認める。木をこのように肯定することによって私は、都市における人間をその自然的環境と本質的感動の中に取戻そうと考えた。木がなければ人間は自らが創り出した人工の中にいるだけだ。その場合、人間がその幾何学の厳密さ、純粹さ、力強さの中に自己を肯定することは正しい。しかし多くの場合、すべてが不調和で醜悪で獣的であるから、都市の一部または全体にわたって木がなければ人間は、衰弱した秩序の不安と宿命的な混乱の恣意の中に踏み迷い、裸で貧しいことを悲し

む(同, 92)。

そしてこの文脈で、「マンハッタンの真只中のセントラル・パーク」を「木のない都市の唯一の仙境」として高く評価する。それは、彼の概算では地価450万フランにもなる貴重な土地であるが、「このような莫大な財宝をマンハッタンの真中にそのまま触れずにおくということは、それこそ至高の市民的態度、凡俗を脱した態度、力強い社会のしるしである」と絶賛する(同, 93)。

にもかかわらず彼は、同じ著作の別の箇所で「セントラル・パークはあまりにも大きすぎ、それは建物の海にかこまれた島である。それは問題だ。ひとはセントラル・パークを無人地帯を行くように通り過ぎる。セントラル・パークの緑ととりわけ空地はマンハットン全体に分散されふやされるべきである」(同, 258)と述べる。「デカルト主義的都市」の「幾何学の厳密さ」がもたらす「不調和」「醜悪」から人間の「本質的感動」を「取り戻す」「至高の市民的態度」を体現していたセントラル・パークも、デカルト的合理性に沿ってさらに作りかえるべきものと見なされているのである。

摩天楼の夢物語を、単純にして迫力ある饒舌で語り、セントラル・パークに対して矛盾した評価を下すコルビュジェに、ニューヨークの人々はある種の「パラノイア」を見た(コールハース, 1999)。それでも、このような二つのセントラル・パーク観は、機能主義に収まりきれないものをさらに機能主義的に解決しようとする、彼の、緑に対する態度をよく表している。都市では、緑や自然は、合理的な関係の中に機能化されることにより、「本質的感動」を生むことになるのである。彼は、人間の情緒や感情を、機能的な関係の中に取り込むことを、建築や都市計画の重要な仕事のひとつだと考えているが(コルビュジェ, 1968b)、直線、直角、幾何学に奉仕する都市計画が、緑と結びつく関係はこのような思考に支えられている。

「デカルト主義的都市」は誰が造るのだろうか。コルビュジェに関する

いくつかの逸話や事実が、この問題を考える材料を提供する。フランス共産党が戦時中彼に入党を勧めたとき、「私は、私に参加するのが彼らではないか、と言ってやった」というエピソードが伝わっているが、それは、政治は、建築家、都市計画家としての彼の信念を基準にして押し量られていたことを推測させる(ジェンクス, 1978: 170)。それでも彼はムッソリーニに『輝く都市』を見せて「あなたは新しい政府を作りました。ここにその政府とともに進む新しい建築と都市計画があります」といったという(同, 166)。またヴィシー政府は、1940年、3人の建築家のみに実際の活動を許す法令を作ったがその内の一人は彼であったし、彼はこの政府で復興計画の委員も務めている。加えて、この政府によってアルジェに派遣され、都市計画の策定と実行に関わっている。さらに彼は、「非デカルト的」歴史の堆積を「斧で断ち切った」オースマンのパリ改造を高く評価する。彼はファシストではなかったが、権威主義的政治体制に自らの構想の実現を託そうとしたのである。そして彼に親近感を寄せて彼の伝記を書いているC・ジェンクスも、権威主義的政治体制に親和的なコルビュジェのメンタリティーが、政治的エリート主義や「小さな貴族政治」の肯定とそれを支える「文化的ピラミッド」の考え方 頂点には前衛のエリート、中間にはロマンティックなものやアカデミックなもの、底辺には、間違っ
て導かれ混乱している「善人」が配置されるピラミッド に通じていたことを指摘している(同, 167)。「ニューヨークの摩天楼は小さすぎる」としたスーパー・モダンの機能的合理主義は、権威主義的エリート政治にその実現の担い手を見いだそうとしたのである¹⁾。

ホルクハイマー=アドルノを再び引けば、過程があらかじめ決定されているということのうちに、啓蒙の非真理があった。「デカルト的合理性」なる啓蒙は、過程をあらかじめ囲い込んでしまう。そして、ルフェーブルが皮肉っぽく名づける「総合しうる人間」「創造主」「世界の建築家」たるコルビュジェ(Lefebvre, 1996: 98)によって囲い込まれた過程を、オルムステッドのように、「民主主義」や「公的討論」に付すのは、非効率に

なり、効率的体制としての権威主義が選ばれる。またこのような機能主義 = 権威主義からは、「市民の福祉を確実にする」(関)ための緑の意義や、オルムステッドには見えた、公園で、子供が元気に遊んでいる姿を見て、涙を流す貧しい母親たちの姿は見えてこない。

「コルビュジェとは誰か」という問いがある(磯崎, 2000)。画家、建築家、都市計画家、著述家、彫刻家、装飾家として多彩な活動を繰り広げ、多くのことを「パラノイア」的に語る彼には、たしかにこのような問いが成立するかもしれない。だがルフェーブルがいうように、コルビュジェは、大気、太陽、木々の緑と都市の住民との関係を、彼のみがあやつれる宇宙のリズムに従っているかのごとく冗舌に語った「都市の哲学者」でもあった(Lefebvre, 1996: 98)。しかもこのような自然を、直線、直角、鉄筋、エレベーターという機能主義的近代の道具建てと無頓着に併存させることによって語ったのである。そしてこの背後には、現代都市の抱える問題についての建築学と都市計画を軸とした確固とした知識があったし、それなくしては彼の冗舌な哲学は生まれなかったであろう。この哲学と知識の彼独自のアマalgamが、彼の計画実践とそれを支える計画理念を生み出した。それは建築や都市計画の知識を核として都市社会は徹底的に機能的に作り変えることができるという信念に支えられていたし、われわれに、ハワードやオルムステッドとは異なる、都市と自然の処理の仕方もありうることを教える実践と理念だったのである。

おわりに

ハワードは、レッチワースとウェルウィンに実際に田園都市を作ったし、都市の「過密によってえられるものは何もない」という彼のアイディアの基本は、いわゆる「分散派」の都市計画家たちによって、芝生や木々に囲まれた田園郊外の住宅地造成に引き継がれていった。直線、直角、幾何学、エレベーター、ガラスのコルビュジェの都市も、多くの国で、戦後の都市の景観を大きく変えていったモダニズム建築の福音となり、現実の都市造

りに影響を与えていった。ハウードの系譜が「分散の利益」に与しようとしたとすれば、コルビュジェの系譜は「集積の利益」のために都市を作りかえようとした。それでもジェイコブスは、ハウードやコルビュジェの都市は、つまるところユートピアの都市ではなかったのかという²⁾。緑に囲まれた同質的集団で構成されるがゆえに、しばしば排他的になる郊外の「田園都市」的コミュニティは、都市にも人間が生き、活動していることの意味を捉えていないし、都市計画家主導の機能主義的都市の中に、人間や緑を散りばめるコルビュジェの都市にも、都市の「人々」の生きた姿は見えてこない、というのが彼女が伝えようとするメッセージである。さらに彼女は、「垂直的田園都市」というコルビュジェ自身が自分の都市を語った用語を引き、一見対立する両者も、都市の生きた姿を見ていないという点で同根であるとする。ジェイコブスの都市は、そこで生活し活動する多様な人々の「有機体」的なネットワークであり、かつ彼女は「都市はプロセスである」という。コルビュジェが、街路から無駄な空間を無くし、「現在の街路の概念を完全に変えること」に興味を持つのに対して、彼女は、異質なものが触れ合い交流する「公共空間」としての「歩道」に注目し、生活の中にとけ込んだ近隣公園の用途に関心を寄せる(Jacobs, 1961)。

ジェイコブスに言及した所以は、都市は自然と相容れないとするハウードの志向や、都市をさらに機能化し、自然のための空間を計画的に作りだすというコルビュジェの志向とともに、ジェイコブスの志向もありうること、そして本稿では、オルムステッドにこのような志向の一例を見ようとしたということを伝えたいためである。オルムステッドの言説と実践からは、都市だからこそ「公園問題」が発生するという主張を読み取れるし、「貧しい母親たち」に象徴される都市に住む人々や、「公的討論」の過程や、その過程の中で緑をアーキテクトする専門家集団の位置や役割という問題を含む「公園問題」は、つまるところ「民主主義の理念を樹木と土に託して表現する」営みが生まざるをえない問題だとされていたのである。

都市をめぐるより大きな枠組みでいえば、ハワードは「分散の利益」対「集積の利益」という問題軸を立てた。これに対しコルビュジェとオルムステッドは、誰がどのように「集積の利益」を生みだし活用するかという問題軸が成立することを示し、それぞれの立場から都市と自然との関係を処理しようとしたのである。そして各々は、ルソー＝ハイデガー的な反都市主義、自然を征服対象とする近代啓蒙主義の系譜、そのような啓蒙を受け入れつつもその自己反省を内に含もうとする思想と、それぞれ響きあっているのである。そしてさらにいえば、これらの軸、とりわけコルビュジェ対オルムステッドは政治体制の選好問題とも交錯する。全能の計画家によって「過程」も含めてあらかじめ決定された全一的計画を、トップダウン的に執行するという極限的イメージと結びつきやすいコルビュジェの志向は、権威主義や全体主義の体制と親和的になろうとし、「公的討論」やその「過程」での専門家の役割に関心を寄せるオルムステッドの志向は多元的民主主義と親和力を持つからである。ちなみに、都市に住む人々の生活やその福祉に等しく社会改良主義的な目を向けつつも、オルムステッドと関を分かつのは、この軸であり、この点では関は、コルビュジェに近いといえるかもしれない。

都市と自然の関係は、自然への態度、都市への態度、さらには政治体制への態度等の諸次元の交錯の中で観念され処理される³⁾。これまで述べてきたことは、この種の当然過ぎることだったのかもしれないが、それでもハワード、コルビュジェ、オルムステッド、関、さらには、ウィトルーウィウス、パラディオたちは、この当然のことに改めて目を向けさせてくれる好個の素材だったのである。

それにしてもなぜ都市に自然は必要なのだろうか。今、自然を緑に限定すれば、伊藤達雄は「都市の緑の効用」として次のような次項を列挙する（伊藤，2001：102）。

緑化は人間回復、癒しの機能を果たす

緑地計画は都市の膨張や地域構造を制御する手段の一つとなる

緑地空間は災害時に人命を救う都市に不可欠の防災施設の機能をもつ

緑化は夏のヒートアイランド現象を軽減し、エネルギー節約に貢献する

緑化は植物による炭酸ガスの吸収を増やし、地球温暖化の防止に役立つ

緑が直射日光を遮蔽するため建築物の耐用年数が伸びて地球資源の消費が軽減する

最初の「癒し」を除けば、そして、あげられている「効用」のいくつかは、直接都市には関係していない「効用」であることを問わないとすれば、都市の緑は、都市計画、防災、環境保護等の観点からその「効用」が期待されている。このような観点からは、人はさらに「効用」を追加するかもしれない。だがなぜ都市の人間は「癒し」を求めるのだろうか。

ウォールデンという大きな森で生活しつつ人間や社会を見つめようとしたH・ソローは、自然を次のように捉える。

「自然」はどんな問いもつきつけないし、われわれ人間が発するどんな問いかけにも答えはしない。彼女はとうの昔にそう決心したのだ(ソロー、1995:203)。

またニーチェの次のアフォリズムも、このようなソローに通底する。

慈悲は善と悪に対する自然の大らかな無関心を見つめることのうちにある(ニーチェ、1993:362)。

彼らは、「問い」や「善悪」をいわば括弧に括ってくれるところに自然の「癒し」の力を認めているといえよう。

そして「善悪」に拘泥し、「問い」を発せざるをえない生活は、森の生活というよりはむしろ都市の生活である。都市は組織や個人の複雑な関係で織りなされた分業の網の目を作りだす。人々はこの網の目の中で、個性や自律性や自由を求めて、決断や選択を繰り返す。先に見たように、ジメルはこのような都市の生活が、自然の一片を風景として切り取りそこに

自己を投影する都市的心性を育むと考えていた。決断や選択は、絶えず「問い」や「善悪」の問題を生みだし、それが癒されることを要請する。都市と自然がテーマとして浮上する根底には、自然の「癒し」と都市の生活とのこのような関係が横たわっているといえないだろうか。

- 1) 丸山真男のデカルトへの言及は、都市造りに関するコルビュジェの「デカルト的合理性」なるものを理解するヒントを与える。丸山は『方法序説』の次の箇所を引用し、「主体的作為の思想」と「自然的生成のそれ」との「明白な対置」を行う。

なほ方法序説の次の様な箇所参照。「初めのうちは小さな城下でしかなかったものが時の立つにつれ大都会となつた古き都市」が、「ただ一個の技師が広い野原で思ふままに設計した規則正しい都会」に劣る様に、「やむをえぬ要求に応じながら追々に法律を作つて来た民族は、かの寄り集つた最初から智恵のすぐれた一立法者の制定した法律を守りつづけた民族ほどに立派には醇化せられえないであらう」 主体的作為の思想が自然的生成のそれとの明白な対置に於て絶対主義と結合してあるのを見よ。(落合教授邦訳による(強調筆者=丸山)。(丸山, 1952: 240)

だが『方法序説』のデカルトは、丸山のいう「主体的作為」とは、むしろ別の思考をしているデカルトである。彼はいう。

町の家屋全部を、ちがったやり方で作り直し、通りをもっと美しくするという目的だけで、すべて取り壊してしまうことは見かけられない。しかし多くの人が、建て直しのために自分の家を取りつぶさせる。そればかりか、倒壊の恐れがあったり土台が十分にしっかりしていないときに取り壊さざるをえないのは、よく見られる。こうした実例から、わたしは次のように確信した。一個人が国家を、その根底からすべて変えたり、正しく建て直すために転覆したりして改造しようとするのは、まったく理に反している。……けれども、わたしがその時までに受け入れ信じてきた諸見解すべてにたいしては、自分の信念から一度きっぱりと取り除いてみるのが最善だ、と。後になって、ほかのもっとよい見解を改めて取り入れ、前と同じものでも理性の基準に照らして正しくしてから取り入れるためである(デカルト, 1997: 22-3)。

「ちがったやり方」で町の家屋全部を取り壊すことや、「一個人が国家を、その根底からすべて変えたり」することは、丸山の引用する「ただ一個の技師が広い野原で思ふままに設計した規則正しい都会」に通じるし、われわれにはコルビュジェを連想させる。しかしデカルトは、そのような「主体的作為」を肯定しているわけではないし、引き続き次のように述べる。

公の大きな組織は、いったん倒されると再建は至難で、たんに動揺を受けた場合も、もちこたえることさえ困難をきわめ、しかもその崩壊はきわめて苛酷なものにならざるをえない。さらに、こうした大きな組織の不完全な点についていえば、これらが種々異なっていることだけでも、欠点が多いことを十分確かめられるが、こんな欠点があっても、習慣がそれらの欠点を大きく緩和してきたのは間違いない。しかも習慣は知らず知らずのうちに、欠点の多くを避けたり正したりしてきた。思慮分別だけで

都市の位相(3)(水口)

はこれらの欠点にたいして、これほどうまく対処することはできないだろう。最後に、これらの欠点はたいいてい、その組織を変革するより我慢しやすい。山々のあいだをうねっていた街道が、往来が激しければ、少しずつ平らに踏みならされて通りやすくなり、近道をしようと岩の上によじ登ったり崖の底へ降りたりするよりも、この広い街道を行くほうがはるかによいのと同じである(同、23-4)。

「公の大きな組織」も、先の「都会」や「国家」と同質の素材である。このようにいうデカルトの「主体的作為」は、丸山がデカルトに投影しようとする全一的にして統一的な合理性とは隔たり、むしろそれを「理に反している」として退ける。いうなれば、「啓蒙の自己反省」やK・ポパーのピース・ミールの合理性を想起させる作為である。だがこれは決して「自然的生成のそれ」ではない。習慣の力に目配りし「前と同じものでも理性の基準に照らして正しくしてから取り入れる」このような態度も「主体的作為」の一つの有りようである。そして、それが単なる喩えにしか過ぎないにしても、「都会」や「町の家屋」に言及するデカルトは、都市造りにおいても、丸山やコルビュジェの想定する「主体的作為」とは異なる別の「主体的作為」もありうることを示唆するのである。

ちなみに丸山は、デカルトから「主体的作為の思想が自然的生成のそれとの明白な対置に於て絶対主義と結合してゐる」姿を読みとろうとした。デカルトが絶対主義の思想を表現しているかどうかは、ここでの関心の埒外であるが、この表現は、作為の有りようが政治体制の選好問題と結びつきうることを示しており、興味深い。実際コルビュジェは、「自然的生成」を「古い枠組みの時代錯誤的残存」や引越しのときに捨てるべき「がらくた」を生みだすものと見なしたし、この「自然的生成」に「デカルト的」「主体的作為」を対置する文脈で、エリート主義的権威主義の体制を選好したのである。ここでもデカルトは、必ずしも「デカルト主義者」ではないのである(柄谷, 1994)。

- 2) 宇沢弘文は、ジェイコブスを「ヴェブレンを継ぐ人々」の一人にあげ、彼女の思想と都市の捉え方を、ほぼ本稿と同じ基調で、コルビュジェとの対比で描いている。だが宇沢は、ハワードに好意的である。宇沢は、「田園都市」は20世紀の「新しい町づくりの考え方」を示したものであったにもかかわらず、コルビュジェ流の考え方によって「換骨奪胎」されたものになったという(宇沢, 2000)。ジェイコブスの都市論には、密度の高さ(「集積の利益」)が多様性や開放性と結びつくことによって、都市の生活を人間的に豊かな物にしているという思想があるが、それはしばしば、コンフォーミズムに彩られた同質的で閉鎖的なコミュニティとして郊外の「田園都市」との対比で言及される。そして彼女は、ハワードの「田園都市」を、「分散派」や、このようなコミュニティ観の源流の一つに位置づけていたのである。コルビュジェとともに、ハワードを批判しているところに、ジェイコブスの都市論のユニークさがあることを強調しておきたい。
- 3) 本稿がしばしば参照してきたD・ハーヴェイは、政治的価値や政治体制の選好の態様が、自然や環境の価値付けの態様と関連することを指摘している。だが、彼自身が選好する「環境・社会主義」の当否は別にしても、この関連が都市への態度を整理軸の一つとして検討されているわけではない(Harvey, 1996: chap. 8)。

参 照 文 献

- 石川幹子 (2001) 『都市と緑地』岩波書店
磯崎 新 (2000) 『コルビュジェとはだれか』王国社
伊藤俊太郎 (2002) 『文明と自然』刀水書房
伊藤達雄 (2001) 「都市環境における緑の役割と整備」(田中啓一編『都市環境整備論』)有斐閣
ウィトルーウィウス (1979) (森田慶一訳注)『ウィトルーウィウス建築書』東海大学出版会
宇沢弘文 (2000) 『ヴェブレン』岩波書店
内田芳明 (1987) 『風景と都市の美学』朝日新聞社
紙野桂人 (1990) 『人間都市論』学芸出版社
柄谷行人 (1994) 『探求・』講談社
日下部吉信 (2005) 『ギリシャ哲学と主観性』法政大学出版局
桑子敏雄 (1999) 『環境の哲学』講談社
ゲーテ, J. (1942) (相良守峯訳)『イタリア紀行・上』岩波書店
コストフ, S (1990) (鈴木博之監訳)『建築全史』星雲社
コリングウッド, R. (2002) (平林康之・大沼忠弘訳)『自然の観念』みすず書房
コルビュジェ, L. (1967) (樋口清訳)『ユルバニズム』鹿島出版会
 (1968a) (生田勉・樋口清訳)『伽藍が白かったとき』岩波書店
 (1968b) (坂倉準三訳)『輝く都市』鹿島出版会
コールハース, R. (1999) (鈴木圭介訳)『錯乱のニューヨーク』筑摩書房
ジェンクス, C. (1978) (佐々木宏訳)『ル・コルビュジェ』鹿島出版会
品田 稯 (1974) 『都市の自然史』中央公論社
関 一 (1988) 『都市政策の理論と実際』学陽書房
ソロー, D. (1995) (飯田実訳)『森の生活・下』岩波書店
デカルト, R. (1997) (谷川多佳子訳)『方法序説』岩波書店
ニーチェ, F. (1993) (原佑訳)『権力への意志・下』筑摩書房
野田正彰 (1998) 「都市にとって緑とは何か」(余暇開発センター編『都市にとって自然とは何か』)農山漁村文化協会
ハイデガー, M. (1994) (辻村公一他編)『ハイデッガー全集・13』創文社
パラディオ (1986) (桐敷真次郎編)『建築四書』注解』中央公論美術出版
ハワード, E. (1968) (長素連訳)『明日の田園都市』鹿島出版会
樋口忠彦 (1993) 『日本の景観』筑摩書房
ファイン, A. (1983) (黒川直樹訳)『アメリカの都市と自然』井上書院
ベーコン, F. (1970) (成田成寿訳)『ベーコン・世界の名著20』中央公論社
ホルクハイマー, M. = アドルノ, T. (1990) (徳永恂訳)『啓蒙の弁証法』岩波書店
マルクス, K. (1968) (マルクス = エンゲルス全集刊行委員会訳)『資本論第3巻』大月書店
丸山真男 (1952) 『日本政治思想研究』東京大学出版会
吉村元男 (1993) 『エコハピタ』学芸出版社

都市の位相 (3) (水口)

- Hanes, J. (2002) *The City as Subject*, University of California Press.
- Harvey, D. (1996) *Justice, Nature and the Geography of Difference*, Malden: Blackwell.
- Jacobs, J. (1961) *The Death and Life of the Great American Cities*, New York: Random House.
- Lefebvre, H. (1996) *Writings on Cities*, Blackwell.
- Olmsted, F. L. (1997) *Civilizing American Cities*, Cambridge: MIT Press.
- Palmer, J. A. ed. (2001) *Fifty Key Thinkers of the Environment*, New York: Routledge
- Unwin, R. (1912) *Nothing Gained by Overcrowding*, London: T and C. P. Assn.